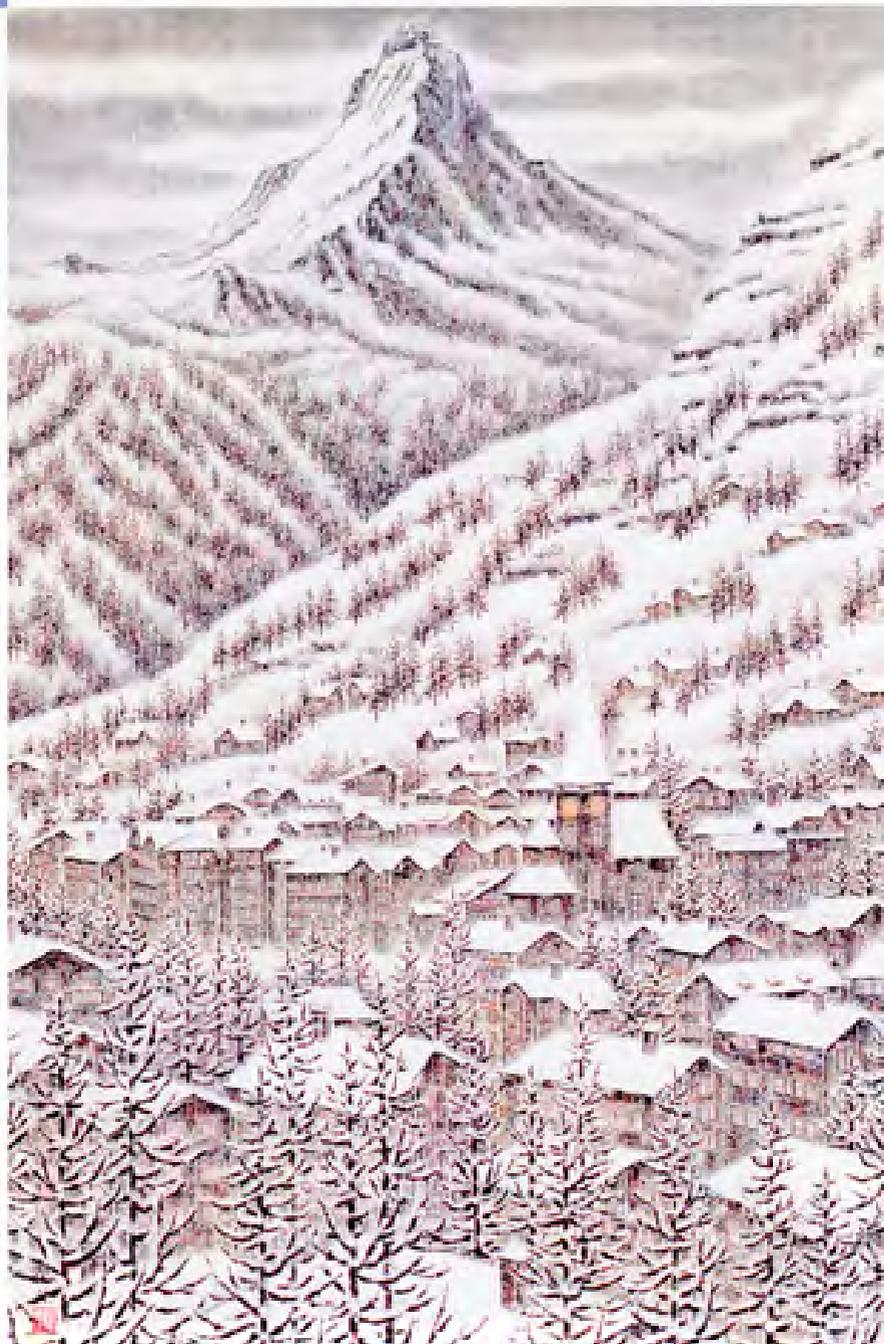


黄河

3
2020

黄河 2020年第3期



通り庭

能村 研三

障子貼さ中の寺を訪ねけり

歳晩の消し込みメモの愉快かな

寝る手順起きての手順去年今年

おほかたは男松の磯馴れ初松籟

折り上げし折鶴が向く恵方かな

初窯の箒目に沿ふ通り庭

葱括る縄の弾力恃むかな

少雪に無聊をかこつ贅なりし

初仕事片付き過ぎて不自由なり

念押しの上撮り目となる初写真

『新編歳時記』の思い出

私が俳句を始めたのは「沖」の刊間もなくであるが、一番最初に手にした歳時記は水原秋櫻子編『新編歳時記』と『新編季語集』である。『能村登四郎読本』の年譜によると私が生まれる前の年昭和二十三年に「世は平和に戻ったものの、戦後の混乱と物資欠乏の時代で、俳句に燃える一方で生活に難渋した。秋櫻子は事情をよく知っていられて『新編歳時記』（大泉書店）の編集に加えてくれた」とある。

さらに昭和三十年には「水原秋櫻子編『季語集』（大泉書店）を出版」とあるから、登四郎がまだ新人時代に秋櫻子先生からの要請により取り組んだ仕事のようなのである。登四郎の書斎机の抽斗には、歳時記編纂の資料がたくさん入っていたのを子供心にも覚えていた。その後版を重ねてタイトルも『現代俳句歳時記』として昭和五十三年には第十六版の歳時記が出ている。

最初に歳時記を作った時は執筆者に篠田悌二郎の名前があったが、版を重ねてからは登四郎、林翔、福永耕二が四季を分担して執筆した。

この歳時記、季語集は他の歳時記とは違って、一つ一つの項目に対して初心者にも優しく丁寧に書かれているのが嬉しかった。季語の解説というよりも項目ごとの随筆を読んでいるような文章である。例えば「雛」の主季語の解説に加えて、傍題季語の「雛の間」「雛の燭」「雛市」「雛の客」などにも一人実作者としてあたたかい視点が注がれている。

執筆者の三人が皆教師であったことから、「受験」「落第」「卒業」「入学」の項になると、単なる解説者の域を越え、自らの経験や思いが文章に散見され、例句の抽出も多い。

入学の傍題の「入園」の項の文は、「幼稚園に【入園】する日も、幼児が指折りかぞえて待っていた楽しい日である」例句としては、

春日に透く廻生えて吾子入園す

能村登四郎

が採り上げられている。この句は私が入園の時を詠んだものである。

この歳時記、季語集は後に版元が講談社に変わったが今は絶版になっていて、古書店で見つけるしかないかも知れない。

能村 研三

地吹雪 森岡 正作

稜線を確かめに出る大旦
 曾祖父に話の及び屠蘇酌めり
 寒林の日矢に鳥語の尖りけり
 地吹雪の奥に墨絵のやうな森
 仁王立ちして吹かれたき大枯野
 マスクして七人よりも敵増やす
 三猿に徹し切れざる冬籠

今年は記録的な暖冬とのことで雪国にも雪が積もっていないと言う。寒波が来て降ってもすぐ溶けてしまうのであろう。私の学生の頃は正月に帰省すると、いつも白銀世界の美しさがあった。土地の人々にとっては、暖かい今の方が有り難いと思わないと思うが、冬されの殺風景さに加え、汚れた雪に道が泥濘んでいる様は、むしろ寒々しい。私には雪よりも雪のない都会の木枯らしの方が冷たく感じられる。

登四郎先生の「雪降りぬ忘れるほどに遠くの日」という御句には、美しくも不思議な雪の景が詠まれている。雪には詩人の心を揺さぶる何かがあるのである。舌足らずな表現ではあるが、雪国の詩人の根底には、雪解けの感動、言わば消えてこそ春が来るという、喜びを知る心があると思う。



「光年」の句と言うと、林翔先生の「光年の中の瞬の身初日燃ゆ」の句がすぐに浮かんでくるが、光年という天文学的な果てしない宇宙空間の中に凍星を持ち込んだ発想が面白い。地球に光が届くまでにはきつと凍星の時を経てきたと思うのも俳人ならではの感慨か。

紅さしてこけしにいのち細雪 中村 重幸
 伝統的なこけし作りという東北の鳴子などを思い浮かべる。こけし職人が精魂込めて手作りで作る。キュッキュツと鳴る首入れの後、最後に絵付けの作業となるが、一筆の紅をさすとこけしにはいのちが注がれる。細雪の季語の斡旋もすばらしい。

雪吊の職人加賀の勢もて 宮岡 弘
 加賀百万石の誇りをもつ金沢は昔から造園に対する関心が高く、造園技術が発達した。中でも雪吊りの技術は「兼六園方式」と呼ばれ、全国の庭師が学びに来たほどである。雪吊りにも種類があり、木の大きさや枝ぶりによって使い分けられるそうだ。枝ぶりの大きな高い木に施されるのが「りんご吊り」。芯杵を立て、その先端から縄を張って枝を支える。

ささやかに炊初二合香しき 吉澤 濱子
 「炊初」とは余り聞き慣れない季語であるが、新年になって初めて飯を炊くこと。正月は餅を食べる機会が多いので、炊初めが二日や三日になることもある。お米を炊くのは今日が今年の最初。一人暮らしなのでささやかに二合を炊いた。「初炊(か)し(ぎ)」などという季語は俳句を始めてから知った。

抽斗に覚えなき鍵 十二月 小坂 尚子
 十二月になると気持ちよく正月を迎えるために大掃除が始まる。まず手始めに身近な机の抽斗から整理することになった。普段使っている鍵類も整理し始めたのだが、一つだけ身に覚えのない鍵が見つかった。家族にもその心当たりを聞いたのだが、解決には至らない。何か心に蟻りを持ちながら抽斗の片づけを続ける。鍵というものは、個人や家族を他から守るものとして必要大事なもののだが、鍵が持つミステリーに何か腑に落ちないものを感じた。

島影に傾ぎ通しの海鼠船 坂下 成紘
 「能登なまこ」は磯の香りが強く、身にしっかりとした味があると食通の間で評判がよい。底引き網や海女による素もぐり、けた網と呼ばれる特殊な曳き網で漁が行われるが、箱眼鏡片手に長い竿を垂直に立てて、船端に身を寄せ海鼠を突いている風景を見ると、舟が転覆しないかと心配されるほど舟を傾かせる。

凍星の経し光年のひかりかな 遠城 健司

能村登四郎の軌跡〔19〕

能村 研三

初あかりそのまま命あかりかな

『寒九』昭60

昭和六十年の章の冒頭に置いた一句。前句集『天上華』が生老病死の果ての放下の句境と評されたが、このころの作品はさらに自由になり自在というより自然であり、遊びの句境が加わってきた時期でもある。「妻を喪つてから三年、人からは明るくなつたと言われるが、心が自在になつたが故である」と述べる。登四郎は誕生日が一月五日で新年にすぐ年を重ねるので、新年にはことさらに自らを奮立たせる気持が高まるようでもあつた。七十四歳を迎え詩魂がいよいよ燃え、俳句が心底面白く楽しいと実感した時期でもあつた。

瓜人先生羽化このかたの大霞

『寒九』昭60

登四郎は「馬酔木」の大先輩の百合山羽公と相生垣瓜人を尊敬していた。この兩人は蛇笏賞を共に受賞している。相生垣瓜人はこの年の二月に八十六歳で亡くなつたのでこの句は敬愛する先輩を偲んだ句である。瓜人の作風は「瓜人仙境」と呼ばれ、超俗の、しかも親しみやすい境地であつた。「羽化」は「羽化登仙」の略。生前から仙境にあつた瓜人が世を去つたことを、本当に羽化登仙したと捉えつつその死を悼み惜しんでいる。登四郎は瓜人について「さながら良寛さまそっくり、実生活も脱俗の人で、漢詩をたしなみ俳画はよくその人柄を出していた」と述べている。

紐すこし貰ひに来たり雛納め

『寒九』昭63

昭和六十二年に父と母が住んでいた離れの家屋を壊し、一つの屋根の下に父と私たちの家族が一緒に住む家を新築した。父も自らの仕事のペースや自由な生活を保ちながらの二世帯による生活が始まつた。三人の子どもたちも父の部屋によく出入りし微笑ましい時を過ごした。同時期の作に「雛月の辛ころげして三童女」へあたたかき夜食の後の部屋覗くなど、その頃の生活ぶりを俳句に詠んでいる。雛壇を飾るには床の間のある父の部屋を一時的に借りた。雛納めをする母親の手伝いに、子どもたちが祖父の所へ紐を貰いにいったのである。

今思へば皆遠火事のごとくなり

『寒九』昭63

同時期に「厨にて国敗れたる日とおもふ」へ「陛下病むこの冬何もかも乾き」へゆつくりと来て老鶴の凍て仕度があるが、『菊塵』のあとがきで、この句集は「昭和に始つた私の昭和俳句の収結」と述懐する。登四郎にとって昭和は兵役も経験し、教職の傍ら俳人として大成したが、幼い長男次男を相次いで亡くし、七歳年下の妻を五年前に亡くす逆縁にも遭遇した。昭和天皇の重篤が報じられている時、喜寿を迎えた登四郎に去来するものは何であつたのだろう。それは「皆遠火事のごとく」と淡々と美しく詠み滋味が深い。



蒼茫集



針の揺れ

成宮紀代子

二つとは

菊地光子

室の花封書を秤る針の揺れ
背に触るる聖樹小さき喫茶店
筆圧に浮かぶ風貌年賀状
勉強と知る向かひの灯霜夜かな
蒟蒻をやたらひねつて女正月
*雪国の雪の降らない怖さかな

朝日射す

千田 敬

水あかり

辻美奈子

大仏の猫背に御座す冬うらら
一張羅に福茶をこぼす婆ちゃん子
屠蘇の酔ひ昭和も遠くなりけり
初日燃ゆ沖の軌跡も半世紀
衛星の巡りてをらむ初御空
*朝日射す朴の芽のはや啼きをらむ

倫敦

千田百里

年用意ごろ寝のかしら芋起こし
*倫敦のしぐれてをらむ漱石忌
魚寝かす塩を一振り小晦日
初明り柀目正しき父の下駄
天籟か地籟か初日登るとき
遠山の瞬の火達磨寒没日

遠き日

宮内とし子

*遠き日の膨らんでくる日向ぼこ
風呂吹に飴色といふ味のである
雪もよひ胴ぶるひして洗濯機
踏む人の無き竹林の霜柱
炬ばなしの身ぶりの影に抱かるる
無頼派のおもかげ残る毛糸帽

葉箱

栗原公子

背伸びせぬ幸せもあり福寿草
未来てふ広き地平よ初日記

*二つとは大切な数鏡餅
若水や神も仏も一つ家に
冬青空山の向かうは雪といふ
ト口箱の嵩のくづれや春隣
福音のやうに額に享く冬日
枯菊の小さくはげて焚かれけり

*去年今年あひだに砂時計くびれ
行く年の積載多すぎはせぬか
帰りきし子が北風を匂はしむ
象牙色の粒が八つ手の花のあと
一枚も欠けず戦火を知る歌留多
日脚伸ぶ羽毛の揺らす水あかり

*すぐ折れるものに矜持と霜柱

しぐるるや女坂てふ石畳
雪もよひ包帯古りし薬箱
寒夕焼鬼の泣き出すかくれんぼ
五郎助ぼう 大沢美智子

*猪鍋や手斧削りの床柱
霜白く化粧ふ風紋九十九里

落葉松の道の尽きたり五郎助ほう
暮るるほかなし枯蓮に雨の来て
初電車少女の髪の絹びかり
御朱印捺す四隅に淑気漲れり

孤独の叫び

能美昌二郎

凾や狼連れて来るごとし
熊穴に熊除け鈴は抽出しに
ひとときの落暉を浴びる枯野かな
*鉄塔の孤独の叫び虎落笛
黄落や商都貫く御堂筋
かつと口開けて鱒焼かれけり

潮鳴集



唐 棧 栗坪和子

億光年 森村江風

*唐棧の織初にして海の紺
冬の日や老師のやうな山羊のぬて
落葉掃く木洩れ日までは掃ききれず
水光をまぶしみて鳩くぐりけり
祝婚の靴揃へをり女正月

寒 月 大矢恒彦

指差して神話を語る寒昂
寒月をことりと置きて水鏡
*土と火を統ぶる縄文山眠る
子らの手の花と開きて六つの花
沈むべきものは沈めて初氷

雪 兔 平松うさぎ

*紙漉くや水の引き出す木の記憶
雪兔月まで逃げてしまひけり
鈍色中村重幸の空飢ゑてをり波の花
日にとけて月に浮かびぬ冬桜
待つといふ静かな決意冬木の芽

沖作品



能村研三選

さざなみのやうに裾野の枯れゆけり
稍まで星の近づく十二月
*抽斗に覚えなき鍵十二月
味覚てふ至福を賜ふ寒の水
重ね来し齡しみじみ除夜の鐘
猪喰ひに来たと一升壇下げて
ワイパーと格闘続く玉霰
雪次第てふ計画でありにけり
*島影に傾ぎ通しの海鼠船
黄落のレノン忌風のニューヨーク
古暦ひとの訃すでに遠くして
賀状書く筆懐旧に止まりがち
寒晴や梁に柱に棟上がる
*凍星の経し光年のひかりかな

神奈川

小坂 尚子

石川

坂下 成紘

埼玉

遠城 健司

千葉

中村 重幸

神奈川

宮岡 弘

市川市

吉澤 濱子

凍滝の裸婦像のごと月に立つ
*紅さしてこけしにいのち細雪
冬ざるる馬籠に団子焼く匂
光るもの光らぬものも冬木の芽
月光のかきわけてゐる竜の玉
灯を伝ふ根本中堂雪深し
*雪吊の職人加賀の勢もて
寒昂父の手大き湯屋の帰途
放蕩の風の容に滝凍つる
ひと時雨ありし町屋の網代垣
地下鉄の不意に地上へ日脚伸ぶ
電飾を支へ冬木不動なり
つつがなき暮し臘梅ふくらみて
*ささやかに炊初二合香しき
初春や踏みこむ一步に力込め